

3. 各学科等の各段階における到達目標

(1) 文学部国文学科

◇中一種免（国語）・高一種免（国語）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し、国文学基礎講座、入門演習などの初年次導入教育を始め、講義等を幅広く学習する。そして、すべての学生が、国文学科の学生としての自覚を持って大学4年間での学習の展望・イメージを抱き、卒業後の進路に対する意識をも持ち得るようにする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2 年次	前期	基礎演習における発表を通じ、教壇に立ち、人前で発表する訓練を開始するとともに、教育学関係では、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、教員となるための基礎的能力と自覚の向上に努める。国語科教育法1の履修を通じて、専門教育を行うための準備段階に入る。
	後期	前期に引き続き、演習科目でプレゼンテーション能力の更なる向上を目指すとともに、教員としての専門教育を、どの分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、3年次へと繋げていく。自分が教員となることの意義を再度問い、責任を持って教職課程の履修を続けることを再確認させる。国語科教育法2（高一種免の場合は選択）の履修でスキルアップを図る。
3 年次	前期	国文学・国語学の専門性を身に付けるため2つの異なる分野のゼミに所属し、それぞれの専門領域を明確にする。ゼミにおける発表は、問題点の発見、資料調査、選択・統合、発表と、すべてが教材研究と授業へ繋がるものと位置付けている。また、国語科教育法3を履修させ、国語教諭としての更なる資質向上を目指す。
	後期	自分の専門領域（卒業論文の研究分野）を決定し、国語教員としての専門性をどこに置くかを考える。教育実習での授業運営に必要な、国語の専門性を十分身に付けられているか、ゼミでの調査・発表を通じて確認させる。国語科教育法4（高一種免の場合は選択）においては、スキルと資質の定着を図る。
4 年次	前期	実習協力校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、教師になるための自覚の確認を行う。さらに、国文学・国語学の研究を進め、国文学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(2) 文学部英語文化コミュニケーション学科

◇中一種免（英語）・高一種免（英語）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	「教育原論」などの履修を通して教職に関する基礎知識を修得する。また、英文学科の学生として4年間学修していく上で必要な英語力と、英語という言語や英語圏の文化や文学についての幅広い知識を身に付けることを目指す。その過程で、他者（異文化を含む）との相互理解に努めようとする寛容な態度を培っていく。
	後期	「教職論」などを通して教師の役割を理解し、教職を目指すことの意義を考える一方で、理想とする教師像を作り上げていく。また、スキル科目の履修によってより実践的な英語力を身に付けつつ、英語という言語や英語圏の文化・文学にも習熟し、対象を正確に理解し表現する態度と能力を養う。
2 年次	前期	教職面談によって、自身の英語力と教科・教職に関する基礎知識を点検し、不足している資質能力を再確認する。「英語科教育法1」を履修し、英語教育に関する基礎知識を修得するとともに、日々行われている授業実践の理論的背景を理解する。また、教科専門科目を偏りなく受講することで、英語教員としての専門性を高めていく。さらに、可能な限りスクールボランティアに参加し、学校現場を体験する。
	後期	「英語科教育法2」の履修によって、学習指導案の作成を含む中学校における授業実践の在り方を、また「児童英語教育」によって、小中連携について理解する。英語圏への半期留学が可能な場合、英語力を飛躍的に伸ばすよう努めるとともに、実体験を通じて異文化に対する理解を深める。
3 年次	前期	教職面談によって、自身の英語力と教科・教職に関する専門知識を点検し、不足している資質能力を再確認する。「英語科教育法3」を履修し、高等学校における英語教育の在り方について理解する。また、「Advanced Research Seminar I」などの受講を通して、言語・文化・文学に関する幅広い知識を身に付け、自ら主体的に課題を発見し、調査・分析する力を養う。
	後期	「英語科教育法4」を履修し、英語教育の諸問題について英語で議論することを通じて、より高度な知識と英語コミュニケーション能力を身に付ける。また、「Advanced Research Seminar II」などを受講することで、言語・文化・文学などの専門研究に取り組み、主体的で批判的・合理的な思考を涵養することを目指す。教師塾やスクールボランティアへ参加している学生は、教育の理論と実践の関係をさらに深く考察できるように努める。
4 年次	前期	教職面談によって、自身の英語力と教科・教職に関する専門知識を点検し、不足している資質能力を再確認する。また、「教育実習」を通して、学校の仕組みや生徒の実態を体験的に理解する。さらに、「Graduation Research Seminar I」などを受講し、言語・文化・文学に関する幅広い知識を動員し、実証的かつ論理的に研究を進める力を涵養する。
	後期	「Graduation Research Seminar II」などを受講し、大学4年間の集大成である卒業研究を完成させる一方で、教職面談と「教職実践演習」の履修により、本学科の教職課程を修了する。「教職実践演習」においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(3) 文学部史学科

◇中一種免（社会）・高一種免（地理歴史）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力、及び歴史学を学ぶことの意義、歴史研究の方法を学ぶための基本的知識の修得を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、教職を目指すすべての学生が、歴史学を学び教育に活かすための自覚と誇りを持てることを目標とする。
	後期	歴史学を学ぶことの意義、歴史研究の方法を学ぶための基本的技術の修得を目指し、教師としての責任、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2 年次	前期	史料講読・入門演習・特殊講義を通じて、歴史研究の方法を学ぶための基本的技術の修得に加え、日本史・東洋史・西洋史の専門領域に関する専門知識を修得して教科内容に関する知識を深め、教職課程科目では、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	教科内容に関する知識を深め、史料講読・入門演習・特殊講義を通じて、歴史研究の方法を学ぶための基本的技術の修得に加え、日本史・東洋史・西洋史の専門領域に関する専門知識を深め、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行うとともに、歴史研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、自らの進路の方向性を決定することを目標とする。
3 年次	前期	史料講読・演習・特殊講義を通じて、歴史研究の方法を学ぶためのより高度な知識・技術の修得に加え、日本史・東洋史・西洋史の専門領域に関する専門知識を深め、教科教育における知識を深め、教職課程科目では、教科教育に関する教育方法論を学び、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	史料講読・演習・特殊講義を通じて、歴史研究の方法を学ぶためのより高度な知識・技術を修得し、卒業論文作成に向けて各自のテーマを設定し、自身のテーマ領域に関する専門知識を深めるとともに、教科教育における知識を深める。また、教職課程科目を通じて、教育の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指す。
4 年次	前期	自身の研究テーマに即した専門知識を深め、卒論作成に向けて史料収集・調査分析を進め、教科教育における知識を深める。協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、教師になるための自覚の確認を行う。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(4) 発達教育学部教育学科

◇幼一種免

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学の学びに必要なアカデミックスキルを身に付けるとともに、教育の理念や幼児の心理、幼児の感性と表現の育ちといった幼稚園教諭を目指すための基礎的知識とあわせ、幼稚園教諭に求められる基本的スキルの一つである音楽に関わる基礎的技能の修得を目指す。また、外国語コミュニケーション、体育、情報機器の基本的操作や情報の扱いについて学び、教職に従事する者としての幅広い素養を修得する。こうした学修を通し、教職課程を履修する学生としての自覚と誇りを持つことを目標とする。
	後期	幼稚園教諭の意義と役割についての学びを通し、幼稚園教諭に求められる資質について自ら考え、幼稚園教諭を目指すものとしての責任と自覚を新たにすることを目標とする。また、幼児期の発達の特性と幼児の発達を促すための望ましい文化環境・文化財や運動あそびについての学びとあわせて、幼稚園教育の理念を体現する教育の内容および方法に関する基礎的知識を修得する。1 年次終了時に教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、2 年次の修得目標を明確にする。
2 年次	前期	領域及び子どもの遊びと遊びを通した学びに関する科目での学びを通し、5 つの「領域」についての理解を深め、小学校以上の学校教育とは異なる「遊びを通しての指導・学び」という幼稚園教育の特性をより深く理解する。 また、教育実習に向けた学修を通して、幼稚園・小学校での教育実習への意識や目標を明確化し、より一層、教職課程の学修に意欲的に取り組む姿勢を身に付けることを目標とする。
	後期	前期に引き続き、領域及び保育内容の指導法に関する科目の学びを拡げる。あわせて、教育課程の学修を通して、幼稚園教育要領に示された理念が各園の保育においてどのように具現化されるのか、教育課程および指導計画の作成について理解し、教育実習で活かせる知識を身に付けることを目指す。また、教育行政に関する学びを通し、幼稚園の在り方をより幅広く多面的に捉え、社会における幼稚園の意義や求められる役割について理解を深める。2 年次終了時に教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、3 年次の修得目標を明確にする。
3 年次	前期	これまでの保育内容及びその指導法の学習で得た学びを教育実習で活かす。教育実習では、観察・参加・指導実習を通して、幼児理解を深めるとともに、幼児理解を基盤とした指導計画の作成から保育実践を経験し幼児教育の本質を理解する。あわせて、実習で得た事例を用いての保育研究の実践的な学びを通し、学究的な視点を持つより質の高い幼稚園教諭としての力を修得することを目標とする。また、実習で捉えた子どもの遊びの実態から、遊びのなかにある学びが小学校の教科学習にどのように結びつくかを捉え、幼少接続を念頭においた幼稚園教育の指導について考え、幼稚園教育に求められる指導を理解する。
	後期	教育実習による理論と実践の往還による学修を通して、自らの成長と課題、教職の責任の重さとやりがいを自覚し、学び続ける幼稚園教諭としての資質を身に付けることを目指す。また、多文化教育に関する学びを通し、グローバル化、ダイバーシティーやジェンダー平等を目指す現代社会における幼児教育のあり方について考え、子ども同士がお互いを認め合い、ともに育ち合う教育を実現するための教育観を持つことを目指す。また、子どもの認知およびパーソナリティの発達の学びを通し、望ましい幼少接続を実現するための教育内容や方法を考える知識を修得する。3 年次終了時には、教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、4 年次の修得目標を明確にする。

4 年次	前期	これまでの教職カルテをもとにした教職課程履修面談により、3 年間の学修の振り返りとともに、自らの教職希望の意志を最終確認するとともに、幼稚園教諭採用試験対策講座や模擬保育に取り組む。そして、幼稚園教諭採用試験に臨むことにより、幼稚園教諭になるための自覚を高める。
	後期	教職課程の総まとめとして位置づけられている保育・教職実践演習の履修にあたっては、各学年の修了時に作成した教職課程記録を作成していることが必須要件になる。これまでの学修を総合的に振り返り、自らの課題を明らかにするとともに、幼稚園教諭として不足している専門的知識や技能についてその修得を目指す。また、4 月から教職に就くものとして、教育者に求められる人間性、倫理観、子どもへの愛情といった部分についてもあらためて自己を省察し、幼稚園教諭としてふさわしい人間であることを自分自身で自覚できることを目標とする。

(4) 発達教育学部教育学科

◇小一種免

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	教育の理念、子どもの心理、特別支援教育、教科の専門的事項に関して学ぶとともに、人権教育、外国語コミュニケーション、体育、情報機器の操作を学び、教職に関する基礎的理解と素養を修得する。これらの学修を通して、今日の教育の現状や課題等を理解するとともに、教職課程履修の意味を理解し、教職を志す意識を確立することを目標とする。
	後期	教職の意義と役割、教育方法、教科指導に関して学ぶとともに、教科の専門的事項に関する学びを深める。また、外国語コミュニケーション、体育を学び、教職に関する基礎的理解と素養を修得する。これらの学修を通して、子供の成長に関わる教職の意義と責任を理解し、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身につけ、目指す教師像を確立していくことを目標とする。1 年次終了時に教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、2 年次の修得目標を明確にする。
2 年次	前期	教科指導に関する学び及び教科の専門的事項に関する学びを深めると同時に、日本国憲法を学び、教職に関する基礎的・基本的理解と素養を修得する。また、教育実習に向けた事前指導を始め、附属小学校において授業観察を行う。これらの学修を通して、教育実習に向けた心構えをもち、学習指導に関する基礎的・基本的な知識・技能及び教科指導における ICT 活用指導力の基礎を身につけることを目標とする。
	後期	教科指導に関する学びをさらに深め、教職に関する基礎的・基本的理解を修得する。また、附属小学校における教育実習と事後指導、学修支援ボランティア等の教育活動を行う。希望者は、海外の教育機関への視察等を含む海外研修に参加する。これらの理論と実践の往還による学修を通して、子供理解を深め、教材研究力、人間関係形成力等の資質・能力を身につけることを目標とする。2 年次終了時に教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、3 年次の修得目標を明確にする。
3 年次	前期	特別活動及び総合的な学習の時間、生徒指導に関学ぶとともに、より専門的な教科指導に関する授業実践演習や通常学級における特別支援及びユニバーサルデザイン教育について学び、教職に関する発展的な深い理解を修得する。さらに、実習協力校における小学校教育実習、学修支援ボランティア等の教育活動を行う。これらの理論と実践の往還による学修を通して、教科指導及び生徒指導に関する授業実践力及び ICT 活用指導力を身につけることを目標とする。
	後期	進路指導に関して学ぶとともに、より専門的な教科指導に関する授業実践演習やリフレクション等について学び、教職に関する発展的な深い理解を修得する。また、実習協力校における小学校教育実習と事後指導、学修支援ボランティア等の教育活動を行う。これらの理論と実践の往還による学修を通して、自らの成長と課題、教職の責任の重さとやりがいを自覚し、学び続ける教員としての資質を身につけることを目標とする。3 年次終了時には、教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、4 年次の修得目標を明確にする。
4 年次	前期	教職課程面談により、自らの教職志望を最終確認する。教員採用試験対策講座や模擬授業・場面指導に取り組み、教員採用試験を受験することによって、教師になるための自覚を高める。また、実習協力校における特別支援学校や中学校での教育実習を行う。これらの理論と実践の往還による学修を通して、これまでの教職課程での学びを相互に関連付けた総合的な理解へと高め、学びの連続性の視点を考慮した質の高い教材研究力・授業実践力を身につけることを目標とする。
	後期	4 年間にわたる教職課程の総まとめとしての教職実践演習により、自己の課題を自覚し、さらに

		必要な知識・技能等を向上させることにより、豊かな人間性と教育的愛情、教職における責任感と使命感、子供の発達や教科指導に関する専門的理解と実践力、さらには学び続ける教師としての資質・能力を総合的に身につけ、教職に就くための自己を確立することを目標とする。本学の教員養成理念に照らして最終確認を行い、教職課程を修了する。
--	--	---

(4) 発達教育学部教育学科

◇特支一種免（知・肢・病）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力や人間力を養成する科目に加え、今日の教育の現状や課題等を学び、教職への学びの方向性を見つけるとともに、特別支援教育を学ぶ意義を理解し、その意志を深める。 教育の理念や子どもの心理等、教育の基礎的理解に関する事項、教科に関する専門的事項科目の履修を始め、教職に関する基礎的素養として、外国語コミュニケーション、体育、情報機器の操作を身につける。
	後期	特別支援学校教諭の基礎となる免許状取得に向け、教育の基礎的理解に関する科目、教科に関する専門的科目の学びを深めると同時に、教職に関する基礎的素養となる科目（外国語コミュニケーション、体育）を学び、それらを修得する。 また、特別支援教育についての自主的、主体的な学習に取り組み、その姿勢と知識を身につける。 1 年次終了時には、教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、2 年次の修得目標を明確にする。
2 年次	前期	特別支援教育についての基本的な理念、全体的な知識について修得するとともに、特別支援学校教諭の基礎となる免許状について、教育の基礎的理解に関する科目、教科に関する専門的事項科目、知的障害児、肢体不自由児の教育について学びをより一層深め、それらを修得する。 更に、附属小学校で教育実習に取り組み、将来教員となることを意識して、子どもや教員、学校全体について理解を深めるとともに、附属小学校や公立小中学校、幼稚園でのスクール・ボランティアに参加し、教育の現場の状況を肌で感じ取る。 また、権利としての教育を規定した「日本国憲法」の全体像を学び、教職を支える法制度理念について理解し、教職に就くにあたっての基盤を固める。
	後期	特別支援学校教諭の基礎となる免許状に関し、教育の基礎的理解に関する科目、教科に関する専門的事項科目の学びをより一層深め、1 年次からの学びを含め、それらの全体像を理解する。 また、特別支援教育について、知的障害者、発達障害者や病弱者の理解を深める。 2 年次終了時には、教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返り、今後の教職への学びに役立たせる。
3 年次	前期	特別支援教育の専門科目については、知的障害児、病弱児の教育について学び、特別支援学校教諭の教員免許の領域の全体をひととおり修得し、4 年次で取り組む教育実習に備える。聴覚障害及び重複障害に関する知識や教育について修得する。 また、特別支援学校教諭の基礎となる免許状に関し、学校における特別活動及び総合的な学習の時間の意義及び内容、学校における生徒指導の進め方や教育相談の意義と理論を理解するとともに、特別支援学校教諭の基礎となる免許に関し、教育実習を行うことにより実践を通して学び、さらにそれらをもとに大学での理論的な学びを深め、教育現場で現実的に活躍することの出来る人材となることを目指す。
	後期	特別支援教育における「免許状に定められることとなる特別支援教育領域以外の領域」として、視覚障害に関する知識を修得する。特別支援教育の専門科目については、肢体不自由児に関する知識や教育についてさらに学びを深める。 また、スクールボランティア等を通して、引き続き学校現場とかかわり、大学での理論的な学びと往還させることにより、生きて働かせることのできる理論・知識・技術を身につける。 3 年次終了時に、教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返り、今後の教職への学びとより理論と実践を往還させた学びに役立たせる。
4 年次	前期	教職課程面談により、自らの教職志望を最終確認する。これまで修得してきた理論をもとに、特別支援学校における教育実習に取り組む。教育実習を通して、障害児の現状や教育課題を現実として理解し、その後の大学での学びに活用する。また、スクールボランティア等を通して、引き続き学校現場とかかわり、大学での理論的な学びと往還させることにより、生きて働かせることのできる理論・知識・技術を身につける。 自らの進路を明確に見定め、卒業論文の作成や多様な体験、人間力の養成等、広い視野に立って進路に向けた学びを充実させる。
	後期	4 年間にわたる教職課程での学びの最終段階として、基礎となる免許状に関する教職実践演習を履修して自己の課題を自覚し、さらに必要な知識・技能等を補てんすることにより、教諭として求められる使命感や責任感、教育的愛情、社会性や対人関係能力、生徒理解等を身につける。 本学の教育理念及び教員養成理念に照らして最終確認を行い、教職課程を修了する。

(4) 発達教育学部教育学科

◇中一種免（音楽）・高一種免（音楽）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	アカデミックスキルを修得し、音楽の表現や理解のための基礎知識や技術を身に付ける。また、授業を通じて今日の教育の現状や課題等を学び、教職課程の意味を理解し、教職を志す意識を確立することにより、教職課程を履修する学生としての自覚と誇りを持つことを目標とする。また、教職科目を履修する中で教員としての資質や適性について考えながら、更に、教職に関する基礎的素養として、外国語コミュニケーション、情報機器の操作などについても学び、幅広いスキルを修得することを目指す。
	後期	音楽の理論と歴史に関する基礎知識や、ピアノ、声楽、管楽器等の基礎的技術を身に付ける。教職論を学び、教師を目指すことの意義、教師としての責任や、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係を考え、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。また、教職課程履修記録を作成し、より充実した履修継続に向けた自らの意志を確認する。
2 年次	前期	教育課程論等の履修とともに、音楽理論、合唱、器楽など、各種のより専門的な内容の授業を受け、音楽の基礎的知識や技術を更に高めて確かなものにする。プレゼンテーション、レポートの作成、発声法の習得、演奏実践などを通して、幅広い表現力を培うとともに、現在の学校や生徒の状況について主体的に学ぶことを目標とする。また、音楽科教育法を通して音楽についての基礎知識・基礎技能を身につけるとともに、現在の学校や生徒の状況について主体的に学ぶことを目標とする。
	後期	前期の学びに加えて、小中接続を意識した音楽科教育方法論で音楽の指導法の学びを開始する。声楽、合奏などを通して、音楽の持つ様々な特性と音楽教育に関する知識や技術を高めていくとともに、現在の学校や生徒の状況について主体的な学びを深めることを目標とする。また、前期に実施した教職履修面談において自らの適性を確認した上で、介護等体験に向けた主体的対話的で深い学びや取り組みを目指す。2 年次終了時に教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、3 年次の修得目標を明確にする。
3 年次	前期	音楽科の指導法の学びを深め、指揮等の科目を履修するとともに、音楽教育で取り扱う内容を理解し身に付けることを目標とする。更に、創造的な音楽科授業を展開するための専門知識として、音楽教育史や音楽社会学を学び、自らの適性や志向に従ってゼミでの研究を開始する。また、教育課程における生徒指導や進路指導の意義について学びを深めていくことを目指す。
	後期	前期に引き続き、音楽のもつ様々な特性と音楽教育に関する、より専門的な内容を修得しながら、中高連携、中高接続について理解しながら実践的な能力を身に付けることを目標とする。作曲等の授業を通して、学校現場での創作や編曲、アンサンブルのスキルを高めることで、次年度に行う教育実習への準備をする。また、ゼミでの学びを通して、分析力や演奏力など総合的な音楽力を養っていくことを目標とする。3 年次終了時には、教職課程履修記録を作成し、その学びを振り返ることにより、4 年次の修得目標を明確にする。
4 年次	前期	教育実習を行い、それによって授業はもとより生徒指導など、学校現場での経験から多くを学び、教師に求められる能力や心構えを明確に意識する。同時に、音楽教育の前提となる音楽の表現力や理解力をいっそう高めることを目標とする。また、教育実習の事後指導や教職履修面談を通して、教育に携わる意志を明確にし、教員採用試験に向けて知識や実践力を高めていくことを目指す。
	後期	4 年間にわたる教職課程の総まとめとしての教職実践演習により、自己の課題を自覚し、必要な知識・技能を向上させることを目標とする。豊かな人間性と教育的愛情、教職における責任感と使命感、生徒の成長や音楽科教育に関する専門的理解と実践力、更には、学び続ける教師としての資質・能力を総合的に身に付け、教職に就くための自己を確立することを目標とする。本学の教員養成理念に照らして最終確認を行い、教職課程を修了する。

(5) 心理共生学部心理共生学科

◇中一種免（保健）・高一種免（保健）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、すべての学生が心理共生学科の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。 また、教職課程履修の意義を認識し、自らの積極的な教職志望の意志を吟味するとともに、教育の理念及び歴史・思想並びに生徒の心身の発達及び学習過程に関する基礎知識を修得し、教職を志す意識の確立を目指す。 更に、教職に関する基礎的素養として、情報機器の操作を学び、修得する。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身につけ、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。 また、教職に関する基礎的素養として、外国語コミュニケーション、体育を学び、修得する。 なお、1 年次終了時において教職課程履修記録を作成し、教職課程担当教員との個別面談により教職課程履修継続の意志を自ら確認する。
2 年次	前期	学習指導要領を基準とした教育課程の意義や編成方法、教科「保健」の目標や全体構造、教育方法の基礎的理論を理解すると同時に、学校における道德教育の意義を理解する。 また、日本国憲法の全体像や人権についての理解を深め、教職に就くにあたっての基盤を固めると同時に、教科の専門領域に関する知識を修得する。 さらに、学校教育現場を知るための体験としてスクールボランティア等に自主的に参加する。
	後期	保健科教員として必要な専門的知識を修得すると同時に、教育や心理・福祉分野における諸問題の存在を理解する。 また、特別の支援を必要とする生徒に対する理解を深め、特別支援教育に関する制度や教育課程、教育的ニーズ、支援の方法等を理解する。 年度末の教職課程履修面談において自らの適性を確認し、教職課程履修継続を再確認したうえで、介護等体験に向けた主体的取組ができていることを目標とする。
3 年次	前期	家庭・学校・地域で発生する諸問題に対して援助できる専門的な技術を修得し、基礎的理論と学校現場における応用技術とを想定した実践的な学習経験を積み重ねる。 また、教育課程における生徒指導の意義や原理、学校における生徒指導の進め方や教育相談の意義と理論を理解する。 更に、スクールボランティアへの参加などを通じて、学校教育に参画する意識を高めたうえで、4 年次の教育実習に向け、教育実習の準備を行うと同時に、介護等体験により、個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深める。
	後期	教科「保健」に関する専門的な知識や学習指導理論を理解し、具体的な授業を想定した学習指導案の作成方法等を身につけると同時に、学校における特別活動及び総合的な学習の時間の意義及び内容、学校と地域との連携、学校安全、進路指導・キャリア教育の意義等について理解する。 教職課程担当教員による履修面談により、教職課程及び教育実習の意義とその責任を自覚したうえで、意欲的に教育実習に臨むことができる準備ができていることを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を通して学校教育の実際を体験的、総合的に理解し、実践的な能力を身につけるとともに、教員免許取得までにさらに修得すべき知識・技能を理解する。 教育実習の事後指導や教職課程面談により、自らの教職志望を最終確認するとともに、教育専門職である教師を多面的に理解し、教育現場に進んでいこうとする心構えができていることを目標とする。
	後期	4 年間にわたる教職課程での学びの最終段階として教職実践演習を履修して、自己の課題を自覚し、さらに必要な知識・技能等を補てんすることにより、教員として求められる使命感や責任感、教育的愛情、社会性や対人関係能力、生徒理解や学級経営、教科の指導力等を身につける。 本学の教育理念及び教員養成理念に照らして最終確認を行い、教職課程を修了し、学位を取得する。

(5) 心理共生学部心理共生学科

◇養教一種免

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、すべての学生が心理共生学科の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。 また、教職課程履修の意義を認識し、自らの積極的な教職志望の意志を吟味するとともに、教育の理念及び歴史・思想並びに児童生徒の心身の発達及び学習過程に関する基礎知識を修得し、教職を志す意識の確立を目指す。 更に、教職に関する基礎的素養として、情報機器の操作を学び、修得する。
	後期	児童生徒の心理を理解し、生活を基盤とした福祉や、医療、保健についての知識や技術を学ぶとともに、教職を目指すことの意義、養護教諭としての職務、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身につけ、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。 また、教職に関する基礎的素養として、外国語コミュニケーション、体育を学び、修得する。 なお、1 年次終了時において教職課程履修記録を作成し、教職課程担当教員との個別面談により教職課程履修継続の意志を自ら確認する。
2 年次	前期	学校保健や看護学、基礎医学についての専門的知識を修得すると同時に、学習指導要領を基準とした教育課程の意義や編成方法、教育方法の基礎的理論、学校における道德教育の意義を理解する。 また日本国憲法の全体像や人権についての理解を深め、教職に就くにあたっての基盤を固める。 さらに、学校教育現場を知るための体験としてスクールボランティア等に自主的に参加する。
	後期	養護教諭として必要な専門的知識を修得すると同時に、教育や心理・福祉分野における諸問題の存在を理解する。 また、特別の支援を必要とする児童及び生徒に対する理解を深め、特別支援教育に関する制度や教育課程、教育的ニーズ、支援の方法等を理解する。 年度末の教職課程履修面談において自らの適性、学校保健・学校看護の専門家である養護教諭を目指すことの再確認を行い、自らの進路の方向性を決定する。
3 年次	前期	病院での看護臨床実習を行うことによって、医療の現場における看護の実際を体験し、養護教諭として必要とされる基礎的看護能力を養う。健康上の問題を持つ対象・家族の療養環境、安全、安楽・自立を考慮したコミュニケーション方法を実践の場で学ぶ。学校と医療機関の連携について考えを深めることができることを目標とする。 また、教育課程における生徒指導の意義や原理、学校における生徒指導の進め方や教育相談の意義と理論を理解する。更に、スクールボランティアへの参加などを通じて、学校教育に参画する意識を高めたうえで、4 年次の教育実習に向け、教育実習の準備を行う。
	後期	養護教諭に必要な専門的な知識を身につけると同時に、多職種連携教育を通して、心理や福祉の職種の専門性を理解したうえで協働する力を持った社会人として、学校や企業や地域社会の発展に発揮できる人材になる。 学校における特別活動及び総合的な学習の時間の意義及び内容、学校と地域との連携、学校安全等について理解する。 教職課程担当教員による履修面談により、教職課程及び教育実習の意義とその責任を自覚したうえで、意欲的に教育実習に臨むことができる準備ができていることを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を通して学校教育の実際を体験的、総合的に理解し、実践的な能力を身につけるとともに、教員免許取得までにさらに修得すべき知識・技能を理解する。 教育実習の事後指導や教職課程面談により、自らの教職志望を最終確認するとともに、教育専門職である教師を多面的に理解し、教育現場に進んでいこうとする心構えができていることを目標とする。
	後期	4 年間にわたる教職課程での学びの最終段階として教職実践演習（養護教諭）を履修して、自己の課題を自覚し、さらに必要な知識・技能等を補てんすることにより、養護教諭として求められる使命感や責任感、教育的愛情、社会性や対人関係能力、生徒理解等を身につける。 本学の教育理念及び教員養成理念に照らして最終確認を行い、教職課程を修了し、学位を取得する。

(6) 家政学部食物栄養学科

◇栄養一種免

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指して組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が食物栄養学科の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2 年次	前期	食物栄養学及び教育学研究に繋げる基礎的な演習を始めるとともに、学校教育や学校食育についての基礎的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	食物栄養学研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、食の専門家及び教諭である栄養教諭を目指すことの再確認を行う。また、学科の食物栄養学の専門教科と、栄養教諭の教科、附属小学校における食育活動を通じて、専門と実践力を身に付けさせることを目標とする。
3 年次	前期	食物栄養学のより専門性の高い、講義や実験実習を通し、また、スクールボランティアや附属小学校における食育活動を通じて、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	管理栄養士課程の学外実習や臨地実習を体験することによって、食物栄養学の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらにゼミに配属されることにより、食物栄養学研究のためのテーマの絞り込みを行うことを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校（または、教育委員会指定の栄養教諭配属校）における栄養教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、教師になるための自覚の確認を行う。さらに、食物栄養学研究を進め、食物栄養学科の学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（栄養教諭）（2 回生～4 回生の各年度の初めと 4 回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習（栄養教諭）においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(6) 家政学部食物栄養学科

◇中一種免（家庭）・高一種免（家庭）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が食物栄養学科の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2 年次	前期	食物栄養学及び教育学研究に繋げる基礎的な演習を始めるとともに、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	食物栄養学研究及び教育学研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、家庭科教員を目指すことの再確認を行い、進路の方向性を決定することを目標とする。
3 年次	前期	食物栄養学のより専門性の高い、講義や実験実習を通し、また、スクールボランティアや附属小学校における食育活動等を通じて、家庭科教員を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	管理栄養士課程の学外実習や臨地実習を体験することによって、食物栄養学の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識する。家庭科教員としての資質向上のために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、ゼミに配属されることにより、食物栄養学研究のためのテーマの絞り込みを行うことを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、教師になるための自覚の確認を行う。さらに、食物栄養学研究を進め、食物栄養学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（2 回生～4 回生の各年度の初めと 4 回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(7) 家政学部生活造形学科

◇中一種免（家庭）・高一種免（家庭）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、学生が教職課程の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2 年次	前期	教育課程論や家庭科教育法などの専門的講義を受講することによって、学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	家庭科教員としての専門的知識や技術を身に付け、生活造形学研究をいかなる分野において深めていくかを自らの興味関心・適性を考慮し主体的に判断し、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行い、進路の方向性を決定することを目標とする。
3 年次	前期	家庭科教員としての専門的知識や技術の向上をめざして、生活造形学専門演習のゼミ所属に向けて、それぞれの専門領域を明確にするとともに、教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	教育の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに生活造形学専門演習を行ない、家庭科の教員としての専門性の確立に向け卒業研究につなげることを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、教師になるための自覚の確認を行う。さらに、卒業研究を進め、生活造形学科学生として、また家庭科の教職を目指すものとしての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（2 回生～4 回生の各年度の初めと 4 回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(8) 現代社会学部現代社会学科

◇中一種免（社会）・高一種免（公民）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	自らが大学入学前に持っていた教員志望の意志の確認および適性の吟味の機会となる時期である。教職課程のカリキュラムの内容とその修得の意義を確認したうえで、教職及び教科専門科目を実際に受講し始めることによって、その基礎知識を修得し、教職を志す意識を確立することを目標とする。
	後期	認定課程の教科専門科目をいくつか履修することにより、目指す課程の基礎知識・能力を身に付けると同時に、自らの教員としての適性を自己吟味する。教職課程履修記録を作成し、今後も継続して真剣に教職課程を履修する意志を確認することを目標とする。
2 年次	前期	教職専門科目については主に中学社会に関する科目を履修し、その基礎能力の強化に努める。教科専門科目については、現代社会学科の主要カリキュラムを構成する専門科目の履修が始まる時期であり、複数の教職課程科目を履修するなかで、実際に担当する教科の教員を目指す自己の姿勢を明確にすることを目標とする。
	後期	教職専門科目、教科専門科目ともに、本格的なカリキュラム履修が続く時期であり、教員としての自己の適性を吟味することが求められる。教職課程履修継続についての自らの意志を確認し、それに基づく教職への主体的取り組みができていることを目標とする。
3 年次	前期	教科専門科目については、現代社会学科の教育課程と並行して受講できる科目を履修する。4 年次の教育実習のために、教育実習校確保の手続きを行う。中学社会を志望する学生は介護等体験に参加する。この段階で、中学社会、高校公民のいずれを（あるいは両方）を取得するかを決定できていることを目標とする。
	後期	教科専門科目についても大部分の履修を終える。スクール・ボランティア等についても、自主的に参加することを求める。教育実習、教員採用試験受験という具体的進路を目指す決意が固まっていることを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を実施し、教育現場における具体的教職体験を通して教員志望者としての自覚を深める。教育実習終了後、教職課程担当教員との履修面接を行い、自らの意志と適性について最終確認をする。教育専門職としての教員を多面的に理解し、教育現場で働く心構えができていることを目標とする。
	後期	教職実践演習（2 回生～4 回生の各年度の初めと 4 回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(9) 法学部法学科

◇中一種免（社会）・高一種免（公民）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	教職課程履修の意義を理解し、教職専門科目及び教科専門科目を実際に受講することによってその基礎知識を修得すると同時に、教職を志す意識を確立することを目標とする。
	後期	前期に引き続き、開講される教職専門科目・教科専門科目を履修し、目指す課程の基礎知識・能力を身に付けると同時に、自らの教職志望に関する適性を吟味し、教職課程を履修する意思を確認することを目標とする。
2 年次	前期	さらに専門的な教職科目を履修し、基礎的能力の向上に努めるとともに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を積むことを目標とする。
	後期	前期に引き続き、専門的な教職科目を履修し、今後の教職課程履修継続についての意思を再確認する。中学校社会科志望の学生には、介護等体験についてのオリエンテーションを行い、実習内容や申し込み手続きについて説明する。今期は、自らの適性を確認し、それに基づく教職課程履修への主体的取り組みができていることを目標とする。
3 年次	前期	4 年次の教育実習を踏まえ、教育実習校確保の手続きを行う。なお、中学社会を志望する学生は介護等体験を履修する。この段階で中学社会、高校公民のいずれを（あるいは両方）を取得するかを決定できていることを目標とする。
	後期	4 年次に実施される教育実習に備え、必要な科目を履修する。教科専門科目についても、大部分の履修を終えることが求められる。多様な教育現場を体験するため、スクールボランティア等への参加を促す。教育実習という、教員への道を進むための具体的ステップを踏む決意ができていることを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を行い、教育現場における具体的教職体験を積む。教育専門職である教師の役割を多面的に理解し、教育現場に進む心構えができていることを目標とする。
	後期	教職実践演習（2 回生～4 回生の各年度の初めと 4 回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(10) データサイエンス学部データサイエンス学科

◇中一種免（数学）・高一種免（数学）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、すべての学生がデータサイエンス学科の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。 また、教職課程履修の意義を認識し、自らの積極的な教職志望の意志を吟味するとともに、教育の理念及び歴史・思想並びに生徒の心身の発達及び学習過程に関する基礎知識を修得し、教職を志す意識の確立を目指す。 更に、教職に関する基礎的素養として、情報機器の操作を学び、修得する。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教えること」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身につけ、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。 また、教職に関する基礎的素養として、外国語コミュニケーション、体育を学び、修得する。 なお、1 年次終了時において教職課程履修記録を作成し、教職課程担当教員との個別面談により教職課程履修継続の意志を自ら確認する。
2 年次	前期	学習指導要領を基準とした教育課程の意義や編成方法、教科「数学」の目標や全体構造、教育方法の基礎的理論を理解すると同時に、学校における道德教育の意義を理解する。 また、日本国憲法の全体像や人権についての理解を深め、教職に就くにあたっての基盤を固めると同時に、教科の専門領域に関する知識を修得する。 さらに、学校教育現場を知るための体験としてスクールボランティア等に自主的に参加する。
	後期	数学科教員として必要な専門的知識を修得すると同時に、解析学における様々な統計手法を理解する。 また、特別の支援を必要とする生徒に対する理解を深め、特別支援教育に関する制度や教育課程、教育的ニーズ、支援の方法等を理解する。 年度末の教職課程履修面談において自らの適性を確認し、教職課程履修継続を再確認したうえで、介護等体験に向けた主体的取組ができていることを目標とする。
3 年次	前期	時系列解析など高度な解析を学びながら、教育課程における生徒指導の意義や原理、学校における生徒指導の進め方や教育相談の意義と理論を理解する。 更に、スクールボランティアへの参加などを通じて、学校教育に参画する意識を高めたうえで、4 年次の教育実習に向け、教育実習の準備を行うと同時に、介護等体験により、個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深める。
	後期	教科「数学」に関する専門的な知識や学習指導理論を理解し、具体的な授業を想定した学習指導案の作成方法等を身につけると同時に、学校における特別活動及び総合的な学習の時間の意義及び内容、学校と地域との連携、学校安全、進路指導・キャリア教育の意義等について理解する。 教職課程担当教員による履修面談により、教職課程及び教育実習の意義とその責任を自覚したうえで、意欲的に教育実習に臨むことができる準備ができていることを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を通して学校教育の実際を体験的、総合的に理解し、実践的な能力を身につけるとともに、教員免許取得までにさらに修得すべき知識・技能を理解する。 教育実習の事後指導や教職課程面談により、自らの教職志望を最終確認するとともに、教育専門職である教師を多面的に理解し、教育現場に進んでいこうとする心構えができていることを目標とする。

	後期	4 年間にわたる教職課程での学びの最終段階として教職実践演習（2 回生～4 回生の各年度の初めと 4 回生後期の初めに実施する教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）を履修して、自己の課題を自覚し、さらに必要な知識・技能等を補てんすることにより、教員として求められる使命感や責任感、教育的愛情、社会性や対人関係能力、生徒理解や学級経営、教科の指導力等を身につける。 本学の教育理念及び教員養成理念に照らして最終確認を行い、教職課程を修了し、学位を取得する。
--	----	--

(10) データサイエンス学部データサイエンス学科

◇高一種免（情報）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	自らが大学入学前に持っていた教員志望の意志の確認および適性の吟味の機会となる時期である。教職課程のカリキュラムの内容とその修得の意義を確認したうえで、「教育の基礎的理解に関する科目等」の科目を実際に受講し始めることによって、その基礎知識を習得し、教職を志す意識を確立することを目標とする。
	後期	「教科に関する専門的事項」の科目として「プログラミングⅠ」を履修し、プログラミングに関する基礎知識の習得と同時に、自らの教員としての適性を自己吟味する。教職課程履修記録を作成し、教職課程担当教員との個別面接の場を設け、今後も継続して真剣に教職課程を履修する意志を確認することを目標とする。
2 年次	前期	データサイエンス学科の主要カリキュラムを構成する専門科目の履修が開始される。情報系基礎科目を履修し、言語 Python によるプログラミングやアルゴリズムに関する基礎知識を習得する。また、教職に関する科目の履修により、情報科の教育目標や指導内容を理解し、教員を目指す自己の姿勢を明確にすることを目標とする。
	後期	学科専門科目から情報系科目を中心に履修しながら教員としての自己の適性を吟味することが求められる。年度末には、教職課程担当教員との履修面接を行い、教科課程履修継続についての自らの意志を確認し、それに基づく教職への主体的取り組みができていることを目標とする。
3 年次	前期	「教育の基礎的理解に関する科目等」の科目については、生徒指導の意義や原理、学校における生徒指導の進め方や教育相談の意義と理論を理解する。 「教科に関する専門的事項」の科目については、学科専門科目と並行して履修し、データベースや情報ネットワーク、マルチメディアを含んだ幅広い知識の習得を目指す。また、4 年次の教育実習のため、実習校確保の手続きを行う。
	後期	「教育の基礎的理解に関する科目等」の科目については、学校における特別活動及び総合的な学習の時間の意義及び内容、学校と地域との連携、学校安全、進路指導・キャリア教育の意義等について理解する。 「教科に関する専門的事項」の科目は大部分の履修を終える。スクール・ボランティア等についても、自主的に参加することを求める。教職課程担当教員による履修面接を経た時点では、教育実習、教員採用試験受験という具体的進路を目指す決意が固まっていることを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を実施し、教育現場における具体的教職体験を通して教員志望者としての自覚を深める。教育実習終了後、教職課程担当教員との履修面接を行い、自らの意志と適性について最終確認をする。教育専門職としての教員を多面的に理解し、教育現場で働く心構えができていることを目標とする。
	後期	教職実践演習（2 回生～4 回生の各年度の初めと 4 回生後期の初めに実施する教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。